

『出口のない海』

2006年／日本／佐々部清監督作品

散華の時代を生きた若者達の青春
自分が生かされている意味を問う

会員 五反 章裕 (63期)

『出口のない海』
発売元：松竹株式会社事業室
販売元：ポニーキャニオン
発売中
¥3,990(税込)
©2006『出口のない海』フィルム
パートナーズ



名作の映画を紹介してほしいといわれると難しいが、「心に残る映画」というものならいくつかある。その中で今回は「出口のない海」という作品を紹介したい。

この映画は司法試験の受験をしていた頃、しかもなかなか結果が出ず苦しんでいた頃に観に行った映画である。自分が置かれている状況、生かされている意味を改めて考える契機となった「心に残る映画」である。

この映画のストーリーは、昭和19年8月、戦局が悪化し追い詰められた日本は、またひとつ捨て身の作戦を行う。それは「回天」という兵器を使った作戦で、定員1名、脱出装置なし、大量の爆薬を積んだ魚雷に乗り込み、自らの命もろとも敵艦に激突するという、まさに必死必中の体当たり攻撃である。この映画では、その「回天」に乗ることを志願した4人の若者が描かれている。甲子園の優勝投手である主人公の並木（市川海老蔵）、オリンピックを目指した長距離ランナー、母親想いの陽気な若者、歌が得意な青年、皆戦争がなければ夢を追い続けていた若者達である。

並木は、出撃命令を待つ潜水艦の中で、大学で野球をやっていた頃のこと、海軍に志願した時のこと、出撃前の最後の休暇に実家を訪れた時のことに思いを巡らす…。軍に戻る時間、出発を待つ夜汽車の中にいる並木のもとに、恋人の美奈子（上野樹里）がぎりぎり間に合う。ここで2人の気持ちは盛り上がり、並木は美奈子に伝える、「俺、美奈ちゃんが好きだー」、しかし、蒸気機関車の音が大きくて並木の声は美奈子には届かないというお決まりのパターン。別れ、夜汽車、告白、しかし思いは伝わらず…。私の大好きな夜汽車が舞台に

なっているからではないが、この映画の一番好きなシーンとして私の中で心の中に残っている（因みにこのシーンに使われたSLは、形から見て「やまぐち号」に使用されているC57とみている）。

並木は死の直前、薄れゆく意識の中で、恋人である美奈子に次のような言葉を残す。

「僕は今、まひる前の青春にいる。その青春を君に捧げる…」

この印象的な言葉とともに、並木は短い生涯を閉じることとなる。特に戦争を美化するわけでもなく、極端に非難するわけでもなく、当時の若者の視点から夢、戦争、現実というものを丁寧に描いた作品でないかと思う。

散華の時代と言われた時代、戦争という激動の渦に巻き込まれながら、当時の若者達は、今の私たちでは想像も及ばないような覚悟をする中で、夢に思いを致し、しかし現実の戦争を受け入れ、「生きるとは何か、何のために死ぬのか？」を考えたのではなかろうか。

そして、司法試験で苦しんでいるときに観た私は、今自分が生きているとはどういうことなのか、自分はなぜ生かされているのかを考えずにはいられなかったし、自分が夢に向かって勉強ができることがいかに幸せであるかを痛感し、感謝の気持ちでいっぱいになった。そして、この思いは司法試験合格の大きな原動力となったし、今弁護士として活動する際にも忘れないようにしようと思っている。

このような時代があって、今がある。そういう当たり前のことを考える契機にもなると思うので、皆さんも時間があったら一度観てみてください。